

時事通信社記者から出発された藤原作弥氏は、実にジャーナリスト経験を豊富にお持ちの方だ。副総裁としての日本銀行時代5年間もその魂を保持されていたという。ジャーナリストの祖父と民俗学分野の比較言語学研究者の父から、知的探検家・探求家としてのDNAを継承されたようだ。そのジャーナリストとしての原点は幼少の頃の体験だったと振り返られる氏に、今回、『私の昭和史体験』と題してお話いただいた。以下、人稱を藤原氏に合わせてまとめさせていただく。 文責：情野瑞穂(国際情報2期生)

私は子供の頃、父のフィールド・ワークに沿って一家揃って転居を繰り返しました。父は主にウラル・アルタイ語系各言語のシャーマン使用の言葉を研究していて、岩手秋田など東北地方を点々とした後に朝鮮に渡り、そして満洲へと移動しました。そこで父は満洲国軍軍官学校の教授をし、モンゴル人兵士に日本語を教えていました。

昭和20年8月10日、ロシア軍が満洲に急進撃してきたときは、こうした父のポストのお陰で、その日最後の貨物列車での脱出が成りました。朝鮮半島から釜山に抜け、海路で日本に戻る予定でしたが、途中鉄橋が封鎖されたために安東で難民生活を強いられ、翌年11月に帰国が叶いました。日本では幸い家も祖父母も無事で、私もやがて進学し、そして記者として社会人の道を歩み始めました。

一方、私たちが住んでいた満蒙の地の日本人約1200名は徒歩での脱出を試みざるを得ませんでした。成人男子は皆戦場に召集されましたので、その構成はほとんどが老幼と女子でした。逃避行の列は糸のように長く続いていたそうです。

それが突然ロシア軍から攻撃に遭いました。戦車や装甲車などが中心の奇襲でした。気絶した人など運良く数10名が助かったのみ、その大量殺戮は筆舌に表わしがたい惨劇だったそうです。後に調べて分かったことですが、30名ほどいた私のクラスメートのうち3名ほどが生存、そして2、3名が残留孤児となり、あとは虐殺されました。この時に学友のほとんどを亡くしていたのです。

こうした事実は、高度成長期、飛ぶ鳥も落つ勢いの日本に生活し、新聞記者として取材活動を職としているうち知り得たものでした。今ある繁栄は彼らの犠牲の上に成り立っている！愕然としました。そして私自身が精一杯を生きて、あの戦争のことをきちんと調べ上げ、語ってゆかねばならないと決意しました。

一体日本は何なんだ？日本の悲劇はどこから始まったのか？

私は文献、資料を駆使し、戦前の昭和史を調べてまいりました。しかしある時、もっと興味深いしかも意義のある中に入り込むこととなります。かの高名な山口淑子さんから自伝を書いてほしいと依頼されたのです。李香蘭の名を持つトップスターで参議院議員を務めあげた、そんな人物のゴーストライターのような真似はできない、と始めは躊躇しておりましたが、話を聞き進むうちに、ああ、彼女の人生こそが昭和史そのもの、

歴史を資料文献に当って調べるよりもずっと生きた事実の積み重ねなのだ、と深い感銘を覚えました。私は山口淑子さんから 30 回以上の面接聴き書きをし、その傍証を取材で補強し、彼女の足跡を辿るために 2 回の訪中をしました。そして出来上がったのが『李香蘭 私の半生』という伝記です。

彼女は生まれも育ちも中国東北地方でしたが、両親は日本人、つまり血はまったくの日本人でした。しかし中国人として育てられ、北京にある中国人のためのミッション・スクールで学びました。実際、周囲は彼女を良家の中国人子女だと思っていたようです。それは、彼女がネイティブ、いやそれ以上の標準中国語を話したからでした。父親が産軍複合企業であった南満洲鉄道（満鉄）で、日本人幹部に標準中国語を教えていたとのことで、東北地方の訛りの抜けない人たちとは違い、幼い頃よりきれいな標準語を話したのです。

中国人李香蘭の活躍はそれは華々しいものでした。始めラジオの歌謡番組でその美声を聞かせていましたが、満洲映画協会（満映）に属して銀幕に登場するようになると、瞬く間にトップスターとなりました。彼女には多岐に渡って類いまれなる才能がありました。彼女は中国人女優として、満洲国の恰好な文化政策、プロパガンダ（宣伝）に利用されたのです。

終戦を迎え、李香蘭として漢奸の罪に問われ極刑を求刑されましたが、日本人山口淑子であることをようやく証明することができ、無罪となりました。昭和 21 年に日本へ帰還し、その後は東宝に所属、看板スターであり続けました。戦後日本初のハリウッド進出、ブロードウェイの舞台にも上がり、また日本政界では参議院議員を 3 期務めて、80 歳過ぎた今もご健在でいらっしゃいます。

彼女がこの歴史の中で翻弄され最も傷ついたのは、恐らくはアイデンティティの喪失ではなかったでしょうか。魯溝橋事件のとき、彼女はミッション・スクールの学生でした。親日の雰囲気であったところが、一転して反日・抗日の運動の渦に巻き込まれます。同級生などからデモへの参加を誘われたとき、中国人として在籍していた日本人の彼女の心の居場所はなくなります。中国人でもない、日本人でもない、その挟間で苦しんだのでした。それはまるで、中国清朝の王女でありながら日本人の養女となって満洲軍で活動した川島芳子さんと、逆のケースで同様の境遇にいたことになります。因縁があるのか、同じ“ヨシコ”ではありましたが、川島芳子さんの方は、漢奸の罪に問われて銃殺刑を処せられました。

私のジャーナリストとしての原点はこうした運命の明暗を自ら経験し、かつ見聞したところにあるのです。現在は日立総合計画研究所の顧問をしておりますが、この名と日本大学総合社会情報研究科の名は非常に類似しているなと感じました。今後も社会を“総合的に”捉える目と思考の重要性を感じ、持ちつづけたいと思っております。